

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 岡 英里奈

論 文 題 目

島崎藤村 歴史と旅をめぐる語りの方

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比	嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田	祐子
委員	名古屋大学	教授	阿部	泰郎
委員	横浜市立大学	名誉教授	山田	俊治

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、島崎藤村の小説作品と紀行文を対象に、歴史と旅をめぐる作家の語りの方
法について論じたものである。

第1部第1章では、『夜明け前』に引用されている、藤村の父である幕末・明治期
の国学者島崎正樹の和歌に注目し、作中における和歌の用いられ方を分析した。「攘夷」
思想が隠蔽されていることなどの特徴から、『夜明け前』という作品の語りのもつ脱「政
治」化という特質を明らかにした。第2章では、島崎正樹の自伝的テキストである「あ
りのまゝ」を、『夜明け前』がどのように語り直しているのかを、特に両者の王滝参籠
の語りを比較することで考察した。第3章では、1930年前後におけるマルクス主義歴
史学、郷土史の叙述と『夜明け前』との比較を行い、『夜明け前』の語りが同時期の歴
史叙述の多様さを包含する混交性を有することを明らかにした。

第2部第4章では、田山花袋、蒲原有明による紀行文と、藤村の作品「旅」とを比
較し、その表現上の特徴を考察した。花袋や有明には見られない〈粹〉の存在が、同
時代の紀行文的な文体に「私」性を呼び込む機能を果たしていることを指摘した。第
5章では『海へ』における私語りについて考察した。藤村の描出する紀行文中での自
画像や、過去の自分の作品の引用行為が、彼自身の過去の作品が保持していた文脈を
再編成しているありさまを分析した。第6章では、1936年における藤村の南米行きと、
その紀行集である『巡礼』について考察した。藤村の訪問した1936年前後における
アルゼンチンやブラジルなどの南米日系移民社会は、様々な政治的課題を抱えていた
ことを指摘し、そうした課題が藤村の発言のあり方に影響を与えていることを明らか
にした。そのような影響の一つとして、南米での体験を語る『巡礼』においては、藤
村が自身の発言の公的責任性から逃れ、文学の言葉として自身の旅を語り直そうとし
ている、と指摘した。第7章では、南米の移民子弟に向けて藤村が贈った「大和言葉
の碑文」の、その後の歴史的変遷について調査分析を行った。藤村の文が刻まれた碑
は、同時に「笠戸丸碑」を兼ねており、その来歴そのものが戦前戦後の日系移民がた
どった歴史と不可分の関係にあるとし、同地の日系移民史を継承していく象徴として
享受されていることを明らかにした。

補論においては、1940年前後における藤村の言説に着目し、藤村による岡倉天心の
再評価のあり方を整理しながら、同じく同時代に天心を盛んに顕彰した日本浪漫派の
言説との比較を行った。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

近代日本文学を代表する作家の一人である島崎藤村をめぐることは、多くの研究が蓄積されてきた。本論文は、そうした分厚い研究史に対し、歴史と旅という角度から、その更新を図っている。これまであまり検討されてこなかった藤村の父親正樹に関する資料を利用したり、小説ではなく紀行文というジャンルの作品を集中的に取り上げたりすることによって、既存の藤村文学の理解に新しい観点を付け加えたものとして評価できる。

本論文の評価に値する点は、大きく二点に集約できる。一点目は、藤村の代表作『夜明け前』の再評価への寄与である。父島崎正樹を介した藤村の近世国学の受容のあり方や、作品内におけるその描き方を細緻に分析し、その脱政治化の戦略を論じた。また『夜明け前』を歴史叙述として捉え直し、同時代の学術的な歴史学や地方の郷土史の叙述と比較しながら、藤村における歴史語りの複雑さを実証的にあきらかにした。いずれも、従来の『夜明け前』の理解をさらに掘り下げる優れた作品論となっている。

もう一点は、藤村の紀行文の歴史的展開を明らかにした点である。島崎藤村についての先行研究は、小説をめぐるものがやはり多い。そのなかで本論文は紀行文という比較的マイナーでありながら興味深いジャンルに着目し、1900年前後から1930年代までの藤村作品における史的展開を、作品論を重ねながら追求した。この作業のなかから、いくつかの貴重な知見を導いている。自然主義思潮が広がる明治後半において流行した紀行文を藤村が書いていないこと、藤村の紀行文的な文章には前後の「枠」が付加されており、小説として仕立てられていること、などである。これらの知見は、藤村における私語りや自己作品の引用などという創作方法の特質を論じる作業と結び合わされ、本論文における通時的な紀行文論へと結実している。既存の研究が取りこぼしてきた領域を埋める、重要な達成であると評価できる。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。政治性や語りの方、旅など、キーワードを多くそろえたことは、本論文の射程の広さとして評価できる一方、それぞれの論点同士の結びつきがやや散漫になったきらいはある。また、第6章および第7章で、島崎藤村と日系南米移民の関係を論じたことは先駆的な成果として重要であるが、南米大陸の各地域における固有性の把握に少し物足りなさがあった。補章についても、島崎藤村による岡倉天心の理解については重要かつ興味深い論点であるだけに、さらに掘り下げて展開することが期待された。以上、課題は残るものの、それぞれ今後の研究の可能性を切り開いた結果であるがためとも言え、上述した本研究の達成は揺るがない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。